

## 朝礼および業務開始方法の改善による職員の意識と利用者の認知機能の変化

澤田 学<sup>1)</sup> 中澤真由美<sup>1)</sup> 川端まゆみ<sup>1)</sup> 藤田 晋平<sup>1)</sup>  
鍋島 司<sup>1)</sup> 三崎孝藏<sup>2)</sup> 堀 敦志<sup>3)</sup>

**要 旨：**介護老人保健施設新田塚ハイツ認知棟にて、朝礼および業務開始方法を改善することで、現状の問題点を改善し、気持ち良く業務をスタートさせ、利用者へのより良いサービスに繋げる事を目的として「朝の改革」を実施した。改革内容は、朝礼後すぐ介護業務に取り掛かっていた現状から、朝礼前に職員が利用者・夜勤者とコミュニケーションを取り、利用者と一緒にラジオ体操をしてから介護業務に取り掛かるよう改善した。その結果、「仕事に対するモチベーションが向上した」、「夜勤者からの情報が得やすくなった」という改善が認められ、「以前より朝の始まりが良くなった」という回答が得られた。今後も更なる業務改善を考え実行していきたい。

【Key words】 業務改善, 認知機能, 職員の意識

### 緒 言

介護老人保健施設新田塚ハイツ認知棟（以下ハイツ認知棟）では、朝の業務の始め方として、職員がサービスステーションに集まり、朝礼を実施した後、すぐにオムツ交換やトランスファー等の業務を始めていた。そのため、「業務に取り掛かる前に、利用者と一緒にコミュニケーションをとる時間が少ない」、「夜勤者から情報を得る時間が少ない」、「体に負担のかかるオムツ交換やトランスファー等をいきなり始めなければならない」という問題があった。

そこで今回、現状の問題点を改善し、気持ち良く業務をスタートさせ、それが利用者へのより良いサービスに繋げる事を目的として「朝の改革」を実施したので、その取り組みについて報告する。

### 方 法

期間は平成21年12月1日から平成22年5月31日までの6ヶ月とし、ハイツ認知棟において、「朝の改革」

を実施した。「朝の改革」の内容としては、朝の業務の始め方を、始業時間に職員が集まる場所を、サービスステーションから利用者が集う食堂に変更し、始業時間までは利用者とのコミュニケーションを取り、夜勤者から情報を得る。始業時間になったら、日勤リーダーが前に出て、利用者に挨拶し、今日の予定や誕生日の人の発表、天候や季節の話等をする。職員が各テーブルに散らばり、利用者と一緒にラジオ体操をする。「今日も一日よろしくをお願いします。」と利用者に挨拶する。その後、職員間で朝礼し、介護業務を始める。以上のように変更した。

その際、「朝の改革」実施前・後で、職員には、「朝の業務の始め方に関するアンケート（以下アンケート）」を、利用者には、「長谷川式簡易知能評価スケール（以下HDS-R）」を用いて認知機能を調査し、比較検討した。調査対象は職員15名および利用者33名とした。

アンケートは、文献<sup>1)</sup>を参考とし、利用者に関しての項目は4段階、職員に関しての項目は6段階評価によるリッカート法（数字が大きい方が肯定的意見）および自由回答法とした。なお、アンケート内容は、①業務前について（3項目：利用者とのコミュニケーション、夜

<sup>1)</sup>介護老人保健施設 新田塚ハイツ 4階ケア棟

<sup>2)</sup>介護老人保健施設 新田塚ハイツ 施設長

<sup>3)</sup>福井医療短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻  
(受付日 2011年12月)

勤者からの情報、利用者の調子の把握)、②業務中について(5項目:身体的負担、身体の硬さ、眠気、チームワーク、モチベーション)、③朝の改革について(2項目:以前との比較、今後の方針)の計10項目とし、その他として自由回答項目を加えた。

分析方法は、アンケートのリッカート法に関しては、ウィルクソン符号付順位検定を実施し、HDS-Rに関しては、マン・ホイットニ検定を実施した。なお、アンケートの自由回答に関しては、グループ化を実施し、利用者の具体的な変化については、カルテからの情報および観察により分析を実施した。統計処理には4 Steps エクセル統計<sup>2)</sup>の付録アドインソフト Statcel3 を使用し、有意水準は5%未満とした。

## 結 果

職員に対するアンケートの結果から、①業務前に関しては、「利用者とのコミュニケーション」、「利用者の調子の把握」の項目に有意差は認められなかった。しかし「夜勤者からの情報」の項目に関しては、実施前・後で有意に改善が認められた( $p < 0.05$ ) (図1)。②業務中に関しては、「身体的負担」、「身体の硬さ」、「眠気」、「チームワーク」の項目に有意差は認められなかった。しかし、「モチベーション」の項目に関しては、実施前・後で有意に改善が認められた( $p < 0.01$ ) (図2, 3)。③朝の改革に関しては、実施後に職員全員が、「以前の朝の始まり方よりも良くなった」と回答し、さらに9割以上の職員が、「今後も継続していきたい」という肯定的な回答が得られた(図4, 5)。

他にも、アンケートの自由回答より、「業務前に利用者に関わりが持て、利用者の様子が分かり、信頼感、安心感が高まった上で介護が出来る」、「体がほぐれ動きやすくなり、利用者への迅速な対応が出来る」、「心身がリフレッシュし、気持ち良くゆとりを持って介護が出来る」、「職員間のコミュニケーションも増え、チームワーク良く笑顔で仕事出来る」との回答があった。

また、利用者のHDS-Rの結果に関しては、実施前・後の点数の有意差は認められず、著明な変化は認められなかった(図6)。しかし、利用者の個別的な観察から、「介護抵抗が強かったUさんへの介護がスムーズに出来るようになった」、「入浴を拒否されるIさんが快く入浴されるようになった」、「朝食後すぐに寝ていたSさん、

レクリエーションに参加したがらないMさんが体操に参加するようになった」、「職員の動きに合わせて自然と体が動き出す利用者が増えた」、「利用者同士声を掛け合っ

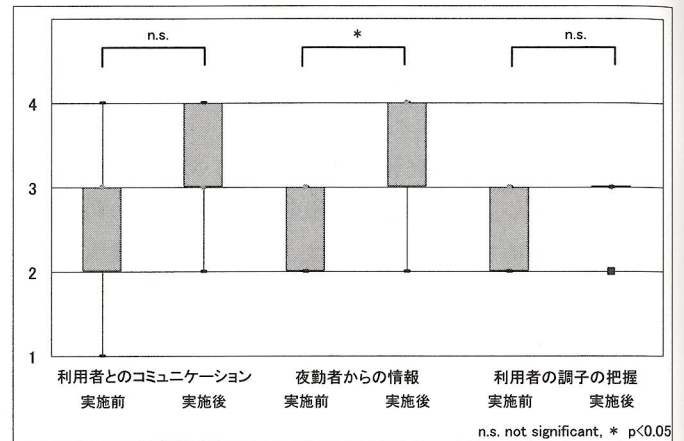


図1：業務前の情報把握の変化

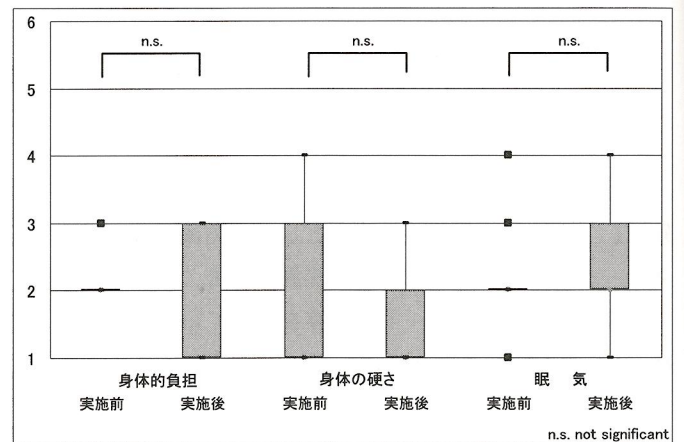


図2：業務中の職員の自覚症状の変化

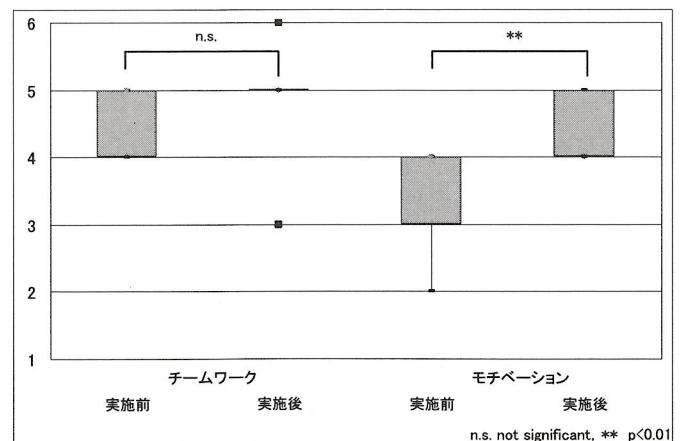


図3：業務中の職員の仕事意識の変化



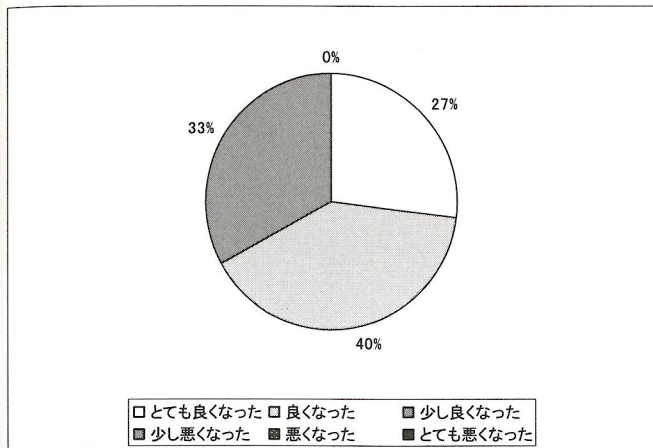


図4：「朝の改革」実施前後の業務比較

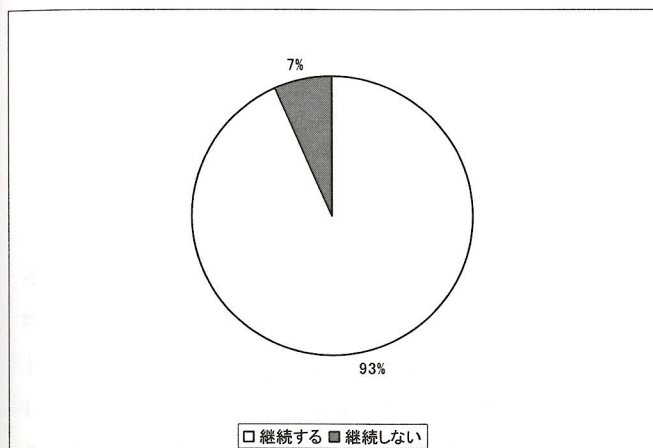


図5：「朝の改革」についての今後の方針

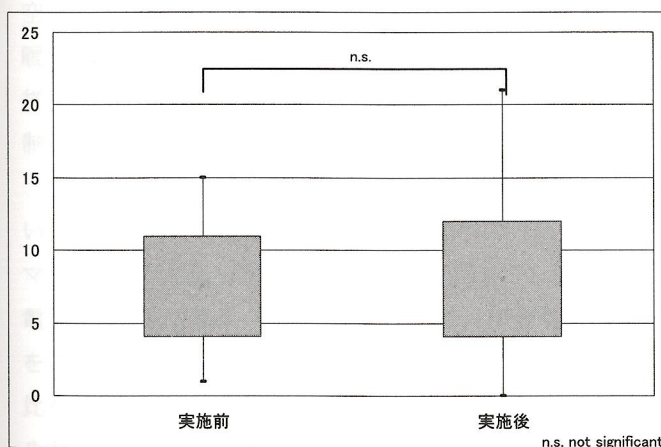


図6：「朝の改革」実施前後の利用者のHDS-Rの変化

## 考 察

職員に対するアンケート結果から、職員に対しては、情報の共有およびモチベーション等の仕事に対する変化が認められ、さらに実施後には、「朝の改革」に対する肯定的な回答が得られたことから、職員に関しては、気持ち良く業務がスタートできるようになり、そのことがアンケートの肯定的意見に繋がったと考えられる。

また、利用者に関しては、HDS-Rの結果については著明な変化は認められなかったものの、利用者の個別的变化においては、様々な肯定的変化が見られた。このことから、利用者に関しては、約6ヶ月間という短期間であり、一概に断定はできないものの、精神機能面において維持ができていたと考えられた。

以上のように、職員および利用者双方ともに肯定的変化があった原因として、「認知症のケアにおいては、介護者の気持ちが落ち着いた状態でないと受容と共感はできない」<sup>2)</sup>とされており、職員の変化が、利用者に対するより良いサービスの提供に繋がったと考えられる。また、利用者に関しては、「自発的な運動量が増えることは、アルツハイマー病の脳病変の進行を押さえて、その予防策として有効である」<sup>3)</sup>という報告もあり、毎朝のラジオ体操や職員とのコミュニケーションが、利用者のめりはりのある活動的な生活に繋がり、利用者の精神機能の維持および向上に関与した可能性があると示唆された。今後も今回実施した「朝の改革」を見直しながらか継続し、更なる業務改善を目指していきたいと考える。

## 文 献

- 1) 酒井隆：アンケート調査と統計解析が分かる本、初版、JMAM、東京、2006。
- 2) 山口晴保編：認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント 快一徹！脳活性化リハビリテーションで進行を防ごう。初版、協同医書出版社、東京、2009、67－72。
- 3) 山口晴保：認知症予防 一読めば納得！脳を守るライフスタイルの秘訣。初版、協同医書出版社、東京、2009、117－123。